

令和 5 年度

函館白百合学園高等学校

推薦入学試験問題

国 語

令和 5 年 1 月 19 日(木)実施

注意事項

1. 試験時間は 50 分です。
2. 問題は□から□まであり、14 ページまであります。
3. 答えはすべて別紙の解答用紙に記入し、解答用紙だけ提出しなさい。

次の問いに答えなさい。

問一 次の――線のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① つい口がスベる。
- ② シンケンに取り組む。
- ③ 帝が国をオサめる。
- ④ チツジョを守る。
- ⑤ 自信をソウシツする。
- ⑥ 王位のケイショウ。
- ⑦ コチョウした表現。
- ⑧ 仕事がソウゴに関係し合う。

問二 次の――線の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 厄介な話になる。
- ② 未来を担う子どもたち。
- ③ 旅行の支度をする。
- ④ その時に必要な措置を取る。

問三 次の□に動物名を漢字で入れて、慣用句を完成させなさい。

- ① どんなに説得したって、□の耳に念仏だ。
- ② 非常に忙しく、□の手も借りたいくらいだ。

問四 次の意味に合う四字熟語を、後のア～オからそれぞれ選びなさい。

- ① わずかな日数・時間。
- ② 心に深く感じ、胸がいっぱいになること。
- ア 異口同音                    イ 取捨選択                    ウ 感慨無量                    エ 一朝一夕                    オ 傍若無人

問五 次の――線の言葉の意味として最も適当なものを、ア～エからそれぞれ選びなさい。

- ① 男は事件の内容をつぶさに語り始めた。
- ア たんたんと                    イ くわしく                    ウ 突然に                    エ 目を閉じて
- ② 学業をなおざりにすることはできない。
- ア おろそかにする                    イ あきらめる                    ウ 優先する                    エ 後回しにする
- ③ 今回の出来事は、世間に吹聴ふいちやうするようなことではない。
- ア 堂々と発表する                    イ よく聞いてもらう                    ウ 言いふらす                    エ 秘密にする

問六 行書で書かれた次の字の中で、点画の省略の特徴が入っていないものはどれか、ア～エから一つ選びなさい。

ア 私                    イ 雲                    ウ 美                    エ 思

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

身分が低い者の家に入って、誰もいなかった時を見つけて、

すくって食べ

今は昔、藤六といふ歌よみありけり。下衆の家に入りて、人もなかりける折を見つけて、**1** 入りにけり。鍋に煮ける物を、すくひ食ひ

ていた時に、この家の主の妻が、

大通りの方から戻って来て

このようにすくって食べているので、「どうしてこのように人もいない所で、どうして、このようにするもの

けるほどに、家あるじの女、水を汲みて、大路のかたより来て見れば、かく**2** すくひ食へば、「いかにかく、人もなき所に、いかで、**3** かくはする

召し上がるのか。ああ、嫌なこと。藤六でいらっしやるのね。

それならば、歌を詠んでください」と言ったので、

ものをばまゐるぞ。あなうたてや。藤六にこそいましけれ。さらば、歌よみ給へ」と言ひければ、

昔から阿弥陀仏の誓いで、地獄の釜の中で煮える罪深い民たちを救うものだと知っています。だから私も（しゃもじで）鍋の中の煮物をすくっているのです。

**4** むかしより阿弥陀仏のちかひにて煮ゆる物をばすくふとぞしる

とこそ詠みたりけれ。

（『宇治拾遺物語』）

\*阿弥陀仏：西方浄土に住む仏。民を救うために四十八の誓いを立てているとされる。

問一 ―― 線**1**「入りにけり」の主語を、ア～エから選びなさい。

- ア 藤六      イ 下衆      ウ 家あるじの女      エ 阿弥陀仏

問二 ――線2 「すくひ食へば」を、現代仮名遣いに改め、全て平仮名で書きなさい。

問三 ――線3 「かくはするもの（このようにするもの）」とは何か。本文中より六字で書き抜きなさい。

問四 ――線4 の和歌「むかしより…」の内容について、最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 無断で他人の家に上がり込んで煮物をすくっていたのは、主の妻を「救い」たかったからなのだとこじつけている。
- イ 無断で他人の家に上がり込んで煮物を食べていることを、「仏が救う」と「しゃもじですくう」とを掛けて正当化している。
- ウ 無断で他人の家に上がり込んでいたが、忙しい主の妻に代わり煮物をしていたのだと、自分の行為を説明している。
- エ 無断で他人の家に上がり込んで煮物を食べていたことは、仏に誓った行為なのだから許されなければならないと主張している。

問五 『宇治拾遺物語』は鎌倉時代に成立した説話集だが、同じ鎌倉時代の作品を、ア～エから選びなさい。

- ア 源氏物語
- イ 奥の細道
- ウ 平家物語
- エ 竹取物語

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

渡会美綾は父の転勤でロンドンに行った家族と離れて一人日本に残り、両親も応援してくれていた美大（美術大学）ではなく、教育学部国語国文学科

へと進学した。夏休みにはロンドンに来るように両親から誘われたが、それも断って埼玉の大宮にいる元国語教師であった祖母春海のもとに滞在し、自分の進路について相談する。

「時がたつのは早いものだね」

春海は「A」言った。

「美綾がもう大学生だからね。そして、ひとりで日本に残って大学に通っているとはね。合格したんだから、とやかく言いたく<sup>1</sup>ないけれど、後悔していないかい」

<sup>2</sup>この話は避けて通れないと覚悟していたので、美綾もあわてなかった。

「後悔ってどつちのこと。美大へ行くのをやめたこと、それとも日本に残ったこと？」

「両方だよ。おまえ、進学先を変えることで利香子さんとだいぶやり合ってたって？ 意地になってロンドンへ行かなかったんじゃないかい」（意地くらい張るよ。当たり前じゃん）

美綾は思ったが、口に出してはもう少し<sup>a</sup>和らげた。

「後悔するのは、それより前に、親に言われるまま絵に進もうとしていたことだよ。もっと早く自分で考えるべきだったの。」

「おまえは何より絵を描くのが好きな子だったよ。うちへ来てもお絵かきばかりしていた。おとなしくて助かったけれど、<sup>b</sup>執念みたいに描いていたよ」

祖母が言うのはその通りだった。特に幼稚園や低学年のころは、いつもいつも鉛筆やクレヨン握っていて、子どものくせに中指にたこがあつたくらいだ。

「それしか知らなかったんだもん。あまりうまく友だちと遊べなかったし、拓也が生まれるまで家でひとりだったし」

春海は少し目を細めた。

「美綾がお絵かきで、和志が工作で、おまえたち二人が家の中で遊ぶ子どもだったね。武史は外を走り回るし、佳奈もじっとしていなかったのに。イギリスに行った拓ちゃんはどうなんだい」

九歳下の拓也は、美綾ほど大宮へ来たことがなかった。会社を辞めた利香子が家にいるようになったからだ。

「拓也は運動神経もいいよ。勉強もよくできる子だし。だから、ロンドンの小学校へ行ってもあまりいじめられ<sup>①</sup>ないですむと思うけど」「余計な苦勞をさせるのはかわいそうだけど、小学生のうちだから、苦勞と思わずできることもあるだろうね」

思いやるが、距離が遠いといった口ぶりだった。一番小さな孫にあまり接していないからだろう。利香子は夫の実家に **C** 長居したがらない。

むき海老をつまんで美綾は言った。

「**4** 大丈夫、拓也ならお母さんの理想でもかなえそうだから。拓也には画家じゃなく、海外で活躍するエリートになってほしいみたいだけだね」

春海はため息をもらした。

「美綾、親が自分の子に期待をかけるのは、ある程度しかたないんだよ。おまえのことだって、画才があると信じたのをとがめられない。実際、おまえは達者に見えたし、あの二人は美大で知り合ったんだし」

「でも、そのせいで視野が狭すぎ。私に美大しか選択肢がないみたい」

愚痴にはするまいと思っていたのに、「**B**」愚痴ってしまった。フォローのつもりで言い添える。

「大学を変えられたのは、おばあちゃんのおかげだよ。うちはアートやデザイン関係の本ばかりで、大宮へ来て文学を知ったんだから。おばあちゃんが読み聞かせてくれたり、あれこれ本を送ってくれるから、「**C**」読書が楽しくなったの。絵以外のものがあるって気づいたんだと思う」・中略・

美綾は一度口をつぐみ、ためらいながら言ってみた。

「お父さん、私が教育の国語国文科を選んだのは、おばあちゃんの **5** 血じゃないかってメールに書いてきたよ。おばあちゃんは国語の先生をしていたから。自分は大宮の家で異色だったとも書いてあった」

「あの子の言うことは、いつも場当たりなんだから」

ふんという態度で返され、美綾もなるほどと思った。父にはたしかに言えている。

「でも、先生だったのは本当でしょう」

「結婚して辞めるような教師に、教師の適性があつたとは思え **2** ないよ」

春海の口ぶりは歯切れがよかった。

「私は、自分が教員向きだったとは思わない。文学は趣味で十分だったんだよ。だから、古典の読書会をいまだに続けている。芳隆が服飾を選んだのはたしかに意外だったけれど、あの子だって結局、仕事は営業企画だからね、異色とまで言えないよ」

「そう……だよ、でも」

美綾は、あと少し水を向けた。

「今から考えると、おばあちゃんって先生っぽかったと思うんだ。宿題しなさいって厳しく言われたし、宿題の見直しもして、まちがいを

直してくれたよね。少なくとも、お母さんよりはずっと上手に教えてくれた。きっと適性はあったと思うな」

「宿題しろと言うのは常識だよ。おまえたち、自分からしようとし<sup>③</sup>ないんだから」

春海はすぐに言い返してから、少し考えるようだった。

「そりゃあ、教員経験で身についたことはあっただろうね。教師の態度というのは、体に染みつくものなんだよ。長年たつと教師の考え方がふだんでも抜けなくなる。無自覚にも教師風を吹かせるくらい、そういう人間ができあがるんだ。本業として望むなら、悪いことでは<sup>④</sup>ないけれど」

**6 美綾を見て、祖母は言葉を続けた。**

「自分の将来は、よく考えて決めることだよ。血のせいなどと安易に決めず、自分がどうするかを考えることだね」

\*和志・武史・佳奈……美綾のいところ

(荻原 規子 『エチュード春一番 第二曲 三日月のボレロ』)

※設問の都合上、漢字などの表記を改めました。

問一 「A」～「C」に当てはまる言葉として最も適当なものを、ア～エからそれぞれ選びなさい。

- ア ついつい                      イ ぜんぜん                      ウ しみじみ                      エ だんだん

問二 **1** **ない**と品詞が同じものを、……線①～④から一つ選びなさい。

問三 ——線2「この話」とはどのような「話」か。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問四

3

に当てはまるものとして最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア ロンドンに絵の勉強をしに行くかどうか
- イ 絵を描くことが本当に好きかどうか
- ウ 本当は文学が好きかどうか
- エ 親のために絵を描くかどうか

問五

——線4「大丈夫。拓也ならお母さんの理想でもかなえそうだから」とあるが、この時の美綾の心情として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 理想を突き付けてくる母親に対しての不満と、出来の良い弟と違って母の期待に応えられないことに対する引け目を感じている。
- イ 自分には期待をしていない母親に対しての怒りと、親の理想を実現してしまう出来の良い弟に対する劣等感を感じている。
- ウ 優秀な弟と違ってロンドンに付いて行かず海外で活躍するエリートを目指さなかったことに対して、母に申し訳なさを感じている。
- エ 画家になってほしいという母の理想は優秀な弟が叶えてくれるから大丈夫だと心配性の祖母を安心させたいと感じている。

問六

——線5「血」と異なる意味で用いられているものを、ア～エから選びなさい。

- ア 血統
- イ 血筋
- ウ 血色
- エ 血縁

問七 ———線**6**「美綾を見て、祖母は言葉を続けた。」とあるが、この時の「祖母」の心情について説明した次の文章中の「**ア**」「**エ**」に入る言葉を、本文中から書き抜きなさい。ただし、指定の字数で答えること。

画家になるために両親と同じく「**ア** 二字」を目指していたと思っていた美綾が、大学の教育学部国語国文学科を選んだことを意外だと感じている。そして、美綾がその進路を、母親への意地や、「**イ** 五字」をしていた自分の血を引いているというところで「**ウ** 三字」決めたのではないかと危惧し、改めて「**エ** 五字」を冷静に決めてほしいと思っている。

問八 ———線**a**「**c**」の漢字の読みを書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言語は状況の中で発せられる。その状況（広い意味での文脈）を無視すると、言葉の表面的な（形式的な）意味は伝わっても、話し手がその言葉に込めた本当の意味は伝わらない。「本当の」意味が伝わらなければ、人と人とのコミュニケーションが成立したとはいえない。

筆者が昔、米国で暮らしていたころ、家族ぐるみで親しくつきあっていた大学の教授がいた。あるとき、その自宅へ夫婦で **a** マネかれたことがある。

食事が出た。会話をしながら、なごやかに食事をするのは素晴らしいことだが、使用言語が母国語でないとすると、なかなか素晴らしいともいっておれない。

突然、妻が横から囁いた。

「**1** やかまし〜」

筆者は妻に教えてやった。

「noisyや」

帰宅してから妻が大笑いした。

「なごが『noisyや』よ。noisyの意味ぐらい教えてもらわなくても知ってるわ。あなたのスープの食べ方があんまりやかましいから注意してあげたのに」

妻は、スープを音をたてて食べている筆者の礼儀の悪さに\*（へたな）辟易して、静かに食べるよう、そっと注意してくれたのである。筆者はいつも妻から英語を尋ねられていたので、また英語を聞かれたと思って、noisyと教えてやったのである。

ことばは聞き手の過去の経験と現在置かれている状況の脈絡の中で解読される。全体的文脈理解が話し手の **2** それと一致しないと、**3** 筆者のこの状況のように、**文字通りの意味は分かっても、配置された言葉の意味は拾い出せない。**

軽い注意障害や軽い意識障害で、全体状況の把握が低下している場合、患者はしばしば、こうした大きな社会的文脈の理解が困難になる。その結果、一つ一つの応答は言語的にはおかしくないが、置かれた状況から言うと、なんだか **4** あさつての方向を向いている**答え**になってしまふことがある。たとえば、回診をしていて、ある患者に話しかけていると、その患者Aは返事をしないのに、その隣の患者Bが返事をすることがある。医者と自分（患者B）とは対話の状況にないにもかかわらず、その状況が判断できず、ことばだけが耳に飛び込んできて、そのことばに反応する。Aに「お年は何歳？」と尋ねているのに、向こうのベッドのBが、それも特に質問者に向かってというわけでもなく、「五十三です」などと答えるのである。

このような文脈をはずれた言語情報の読み取りは、意識が狭まると起こりやすいが、意識が狭まりさえすれば、どのような場合にでも起

こるというものではない。**b** ケツコウ条件がむずかしい。まず、言語機能は活発に活動できる状態でなければならない。言語機能が落ちていけば、テキパキ返事などできようがない。また意識の程度も十分に覚醒し、刺激に十分に反応できるだけの能力がなければならぬ。言語機能が正常に近く、意識もかなりしっかりしていて、しかし状況を読み切れるほどにははっきりしていない、という三条件が揃うと、このようなとんちんかんな反応が生まれる。

筆者の *noisy* も、英語の会話に集中していたために、妻の注意を日本語／英語の変換という文脈の中で読んでしまったのである。意識が狭まっていたわけである。

一般に意味には、形式的な意味と、**5** 実際的な意味がある。この二つは同じであるときもあるし、違っているときもある。センテンスは、必ずしも辞書通りの意味（形式的な意味）を実現するために使われるとは限らない。話しことばは、読者が今読んで下さっている本書の文字言語のように、紙の上に並んだ中性的記号列と異なり、記号列は記号列でも、表情、ジェスチャ、声、などさまざまな生物学的属性を持つ記号列として発せられる。むずかしく言えば、中性的記号列が運ぶ意味（形式的意味）と生物学的音声系列が運ぶ意味（情動の意味）をあわせ持つ、「生きたことば」として発せられる。

これを受け取る側も、言語記号の持つ形式的な意味だけでなく、相手の表情、ジェスチャ、声などすべてこみで送ってくる情動の意味を含めて解読する。記号性だけが（つまり単語にコードされた意味だけが）行き来するのではなく、記号性を含み込んだ生物学的情報が行き来するのである。

丁寧な表現で「こちらへおいでいただけませんか」と知人に気持ちよく言われれば、その通りの意味（形式的意味）が表現されているのだが、もしこれを見知らぬお兄さんに、いやに丁寧な、しかしドスの利いた声でやられれば、逃げようのない恐怖に襲われるかもしれない。あるいはだれか虫の好かない人に、\* 慇懃無礼に言われることだってある。その場合はきわめて事務的な **c** イトが伝達されているわけで、借家を出ていけという交渉の前触れかもしれない。

逆に、**6** 「貴様、こつちへ来い！」ということばが、表現は荒くとも、仲間への親しみをこめた呼びかけであることもある。ことばが運ぶ\*プロソディ、表情、人間配置など、生物学的意味を読み解かない限り、ことばを理解したとは言えないのである。

（山鳥 重『ヒトはなぜことばを使えるか 脳と心のふしぎ』）

※設問の都合上、漢字などの表記を改めました。

\* 辟易：うんざりする。

\* 慇懃無礼：うわべは丁寧に見えて、その実、相手を小馬鹿にしているさま。

\* プロソディ：音調。話し言葉全体としてのリズム、メロディ、抑揚など全体の流れのかたち。

問一 ―― 線1 「やかましい」について、次の(1)、(2)の問いに答えなさい。

(1) 妻はどのようなつもりでこのような発言をしたのか、三十五字以内で説明しなさい。

(2) 夫はどのような意味でこの発言を受け取ったのか、三十五字以内で説明しなさい。

問二 ―― 線2 「それ」が示す内容を本文中から書き抜きなさい。

問三 ―― 線3 「筆者のこの状況のように、文字通りの意味は分かっても、配置された言葉の意味は拾い出せない」とあるが、筆者はなぜ「この状況」で「配置された言葉の意味」を「拾い出せ」なかったのか。本文中の表現を用いて六十字以内で理由を説明しなさい。

問四 ―― 線4 「あさつての方角を向いている答え」とほぼ同義で用いられている表現を本文中から九字で書き抜きなさい。

問五 ―― 線5 「実的な意味」とはどのような「意味」か。これを説明している箇所を三十五字以内で本文中から探し、その最初と最後の五字を書き抜きなさい。

問六 線6 『貴様、こっちへ来い!』ということば」について、生徒A～Dが話している。A～Dの発言のうち、本文の内容に合わないものを一つ選びなさい。

- A 「貴様」という呼びかけは、「貴」をとっても「様」をとっても相手に対する敬意が感じられるよね。
- B そうかな。「貴様」という呼びかけは、基本的には二人称で、相手を見下す時に使うんだよ。
- C 見下すだけではなく、非常に親しい対等の者、また目下の者に対しても使うこともあるよ。
- D 確かに。だから「こっちへ来い」という一見乱暴な言い方でも、状況によって親しみをこめた呼びかけになるんだね。

問七 本文全体をまとめた次の文章中の「ア」～「エ」に入る言葉を、本文中から書き抜きなさい。ただし、指定の字数で答えること。

ことばの理解とは、発する側と受け取る側の間で、辞書通りである言葉の表面的な意味、つまり「ア 六字」だけでなく、言葉が発せられた状況、文脈、相手の表情や声の調子、しぐさといった「イ 四字」情報が含まれた「ウ 六字」が行き来してこそなしえる。そして、その「ウ」に込められた「本当の」意味が伝わることにより、「エ 十四字」が成立するのである。

問八 線a～cのカタカナを漢字に直しなさい。

推薦入試

令和五年度 函館白百合学園高等学校入学試験

国語

解答用紙

受験番号

氏名

得点

一

問一 ①  る ②  ③  める ④

⑤  ⑥  ⑦  ⑧

問二 ①  ②  う ③

④

問三 ①  ②

問四 ①  ②

問五 ①  ②  ③

問六

二

問一  問二  問三

問四  問五

三

問一 A  B  C  問二

問三

問四  問五  問六

問七 ア  イ  ウ  エ

問八 a  かけた b  c

四

問一 (1)  20

(2)  20

問二

問三  50

問四  問五  }

問六

問七 ア  イ  ウ

エ

問八 a  かれた b  c

小計

小計

小計

小計

推薦入試

令和五年度 函館白百合学園高等学校入学試験

国語

解答用紙

受験番号

氏名

100  
得点

一 問一 ① 滑る ② 真剣 ③ 治める ④ 秩序  
 ⑤ 喪失 ⑥ 継承 ⑦ 誇張 ⑧ 相互  
 問二 ① やっかい ② になう ③ したく  
 ④ そち 問三 ① 馬 ② 猫 問四 ① エ ② ウ  
 問五 ① イ ② ア ③ ウ 問六 ウ

各①点×20

小計 20

二 問一 ア ② 問二 すくいくえば ② 問三 鍋に煮ける物 ③ 問四 イ ③ 問五 ウ ①

小計 11

三 問一 A ウ B ア C エ ②×3 問二 ④ ②  
 問三 美綾が進路先を変えたことやロンドンに行かないで日本に残ったことを後悔しているかどうかという話。 ⑥  
 問四 イ ③ 問五 ア ③ 問六 ウ ③  
 問七 ア 美大 イ 国語の先生 ウ 安易に エ 自分の将来 ②×4 Ⅰ 別解：どうするか  
 問八 a やわらげた b しゅうねん c ながい ①×3

小計 34

四 問一 (1) 音をたててスープを食べている夫に、静かに食べるよう注意するつもり。 ④  
 (2) 妻が、英語で「やかましい」をどのように言うのかを尋ねているという意味。 ④  
 問二 全体的文脈理解 ②  
 問三 英語の会話に集中していたために意識が狭まり、妻の注意を日本語から英語に変換するという文脈の中で読んでしまったから。 ⑦  
 問四 とんちんかんな反応 ② 問五 相手の表情、情動的意味 ③  
 問六 A ②  
 問七 ア 形式的な意味 イ 生物学的 ウ 生きたことば ②×4  
 Ⅰ 人と人とのコミュニケーション  
 問八 a 招かれた b 結構 c 意図 ①×3

小計 35